

V 果樹

実況

1 ウメ

(1) 生育状況（園芸研究センター）

園芸研究センターにおける「紅サシ」短果枝の花芽密度(個/cm)は1.86であり、前年の1.94と同程度で、平年の1.70より高い。「剣先」は前年と同程度で平年より高く、「新平太夫」、「福太夫」は前年より低く、平年と同程度である(表1)。

1月17日現在の「紅サシ」花芽重(100芽)は3.06gで、前年の2.18g、平年の2.48gよりかなり重い(図1)。平年の気温データをあてはめて予測した開花始期は2月18日で、前年より14日、平年より7日早い(表2)。

表1 園芸研究センターにおけるウメの花芽密度(個/cm)

年度	紅サシ			剣先			新平太夫			福太夫		
	短果枝	中果枝	長果枝	短果枝	中果枝	長果枝	短果枝	中果枝	長果枝	短果枝	中果枝	長果枝
2019	1.86	1.49	1.16	1.60	1.13	1.11	1.28	0.98	0.88	1.48	1.22	1.00
2018	1.94	1.22	0.99	1.63	1.11	0.84	1.50	1.11	0.88	1.60	1.18	1.01
2017	1.85	1.33	1.04	1.69	1.65	1.10	1.44	1.03	0.93	1.66	1.30	1.17
2016	1.83	1.33	1.11	1.56	1.19	1.02	1.38	1.05	0.94	1.32	1.22	1.01
2015	1.92	1.25	1.02	1.46	1.00	1.03	1.04	0.90	0.84	1.38	1.31	1.12
平年値(2009-2018)	1.70	1.21	1.02	1.40	1.12	0.95	1.23	0.96	0.83	1.39	1.14	0.97

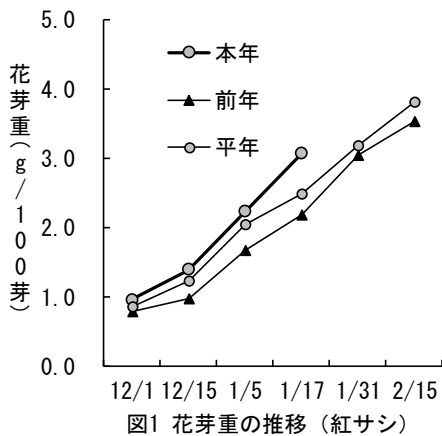


表2 園芸研究センターにおける花芽重(紅サシ) (g/100芽)

年度	調査日						開花始期
	12/1	12/15	1/5	1/17	1/31	2/15	
2019	0.96	1.38	2.22	3.06			
2018	0.78	0.97	1.68	2.18	3.05	3.55	3/4
2017	0.65	1.11	2.49	2.99	3.88	5.17	2/17
2016	0.72	1.14	1.99	3.25	3.70		2/14
2015	1.09	1.29	1.71	2.13	2.86	3.92	3/3
平年値(2009-2018)	0.85	1.23	2.04	2.48	3.18	3.81	2/25

(2) 地域状況

1月下旬現在、産地全体のせん定作業進捗は8割程度。全般に花芽の着生は前年、平年より少ない。褐色こうやく病の発生している圃場がある。

2 ナシ

(1) 生育状況（農業試験場）

農業試験場における「幸水」の自発休眠覚醒は12月30日であった。これは前年より12日、平年(過去5か年平均)より5日遅かった。1月15日現在のDVI(発育指数)は、1.348(前年1.649、平年1.483)で自発休眠から他発休眠への移行期間(DVI 1~2)にある。1月下旬には他発休眠期に移行する見込みであり、他発休眠期以降は気温が高い日が多いほど開花が早まる。

(2) 地域状況

12月以降、せん定作業が順調に行われている。

3 カキ

(1) 生育状況（農業試験場）

休眠期中であり特に変わったところはない。

(2) 地域状況

積雪がないため、せん定作業が進められている。

対 策

1 各樹種共通

(1) 樹体の雪害対策

降雪中は園内を見回り、枝に付着した雪を払い落とし踏圧する。雪に埋まった樹や枝は、放っておくと融雪時の沈降により裂開するので、すみやかに掘り出す。ナシ棚などに冠雪した場合には、早急に払い落とす。

(2) ハウスの雪害対策

ブドウやイチジクなど果樹においてもハウスの導入件数が増加しており、高価な施設を雪害から保護するために十分な備えが必要である。

巻き上げ式の天井ビニールは、確実に巻き上げて積雪可能部分が少なくなるように点検しておく。10年に一度の豪雪にも耐えられるよう、大雪警報が発令されたら丸太や竹・パイプなどの補強資材をハウス内かその近辺に確保しておく。また、除雪対策についても計画しておく。

(3) 穂木の採取

春季に苗木養成や高接ぎの計画がある場合は、2月中に穂木を採取しておく。

穂木は、病虫害やキズのない健全な1年生枝(新梢)を採取する。

採取した穂木は、鮮度を保つために、大きなポリ袋や農業用ビニールフィルムに包んで密封し、5℃以下の冷蔵庫内で凍結しないように注意しながら、接ぎ木時期まで保管する。

2 ウメ

(1) ミツバチ巣箱の設置

結実の良否は、貯蔵養分・花質・開花期間の気象条件などの要因で決まる。結実率を高めるためには開花期間中の交配用ミツバチの放飼が必要である。

巣箱は、風当たりの弱い場所を選んで、出入り口を南側へ向け、中に水が入らないよう出入口を若干、下り勾配にして設置する。ミツバチは巣箱の外で活動している間に、わずかでも巣箱の位置や方向が変えられてしまうと、巣箱へ帰還できなくなるので、設置後は絶対に巣箱を移動させないように注意する。また、巣箱の設置中は薬剤散布をしない。

雪が降り積もったら、出入り口の前1m四方の除雪を行い、着陸場所の確保を行う。

(2) 越冬病害の防除

石灰硫黄合剤は、早咲きの花が咲き始めた時期に散布すると黒星病に対して防除効果が高い。ただし、樹勢の弱った樹に高濃度の石灰硫黄合剤を散布すると、弱小な短果枝や花芽が枯れる恐れがあるので、樹勢や薬剤濃度に注意する。また、残った薬液などを最初の場所に戻って重複散布すると薬害が発生しやすいので、過不足を生じないように薬液を準備する。

また、褐色こややく病（写真1）の発生がみられる場合は、石灰硫黄合剤の散布で防除することができる。こややく病はウメシロカイガラムシの分泌物を栄養源として増殖するため、ウメシロカイガラムシを繁殖させないことが基本となる。

なお、石灰硫黄合剤・マシン油乳剤・ボルドー剤の混用はできない。石灰硫黄合剤とマシン油乳剤は交互（隔年）散布を原則とする。同じシーズンに散布する場合はマシン油乳剤と石灰硫黄合剤とは1か月以上の間隔をあける。また、石灰硫黄合剤とボルドー剤とは2週間以上の期間をあけて散布する。

昨年12月の気温が高かった影響で、今年の開花は前年より2週間程度早まりそうなので、薬剤散布が遅れないように準備を進めておく。



写真1 褐色こややく病

(3) 芽出し肥の準備

3月になると芽出し肥の施用時期となるので、今から準備しておく。芽出し肥は春先からの新梢伸長を促進し、樹勢を維持するために必要である。

3 ナシ

(1) 整枝・せん定

せん定が終了していない園では、せん定作業を急ぐ。

主枝は3本とし、それぞれに垂主枝を2～3本配置する。垂主枝は1.8～2.0m間隔で、垂主枝どうしは並行になるように配置する。主枝、垂主枝の先端は棚面から40cm程度の高さで切返す（図2）。

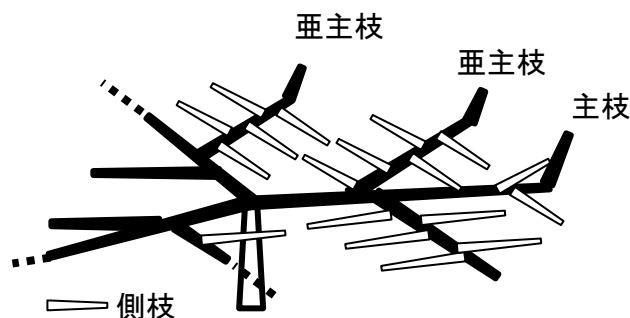


図2 枝の配置説明

側枝は主枝・垂主枝の両側にそれぞれ40cm間隔で配置する。年数の経った側枝では果実品質が低下する可能性があるため、3～4年生以上の長大化した古い側枝は、原則としてせん定して新しい側枝に更新する。また、1㎡当たり1～2本程度の予備枝を残し、さらに翌年度以降の着果確保を計画しておく。

せん定が終了したら棚付・誘引作業を行う。主枝・垂主枝は強く伸びるように先端部を立てる。側枝と主枝、垂主枝の角度は90°を基本に、棚面がまんべんなく埋まるように側枝を配置する。また、側枝は棚面に水平に誘引する。

4 カキ

(1) 整枝・せん定

10年生以上の成園で、隣接樹と枝が交差して過密状態になっている場合は、樹勢を考慮しながら縮間伐を実施する。縮間伐では、大きな枝の分岐部から間引きせん定を行い、永久樹との枝先間隔を1m程度空けるようにする。

永久樹については、樹勢を保つため、それぞれの骨格枝の先端部に、上向きの発育枝を配置し、その発育枝は必ず切り返しを行う。垂主枝は1主枝当たり2本程度にして、垂主枝上に側枝をまんべん

く配置する。主枝から出ている他の太枝は整理し、骨格枝への日当たり改善をめざす。炭疽病などの病枝は、せん定で取り除き越冬菌密度の低下をはかる。

(2) 病虫害防除

せん定後の3月に、主幹部を中心に粗皮削りを実施し、生育期の病虫害の発生を抑制する。カイガラムシ類の越冬個体数が多い園では必ず粗皮削りを行う。高圧洗浄機を用いて、樹体に高圧水を噴射する方法は作業能率が高い。

5 イチジク

(1) ハウスの管理

イチジクは休眠が非常に浅く、冬期間でもハウスを密閉して温度が上がると、早くから樹液の流動が活発になり、春先の戻り寒波によって寒凍害を受けやすくなる。そのため、ハウス内の温度が15℃以上にならないよう、晴天日の昼間はハウスを開放・換気し、温度上昇を防ぐ。

また、土壌の水分状態を確認し、乾燥してきたら適宜かん水を行う。

(2) せん定

せん定作業は厳寒期を過ぎた3月上旬に行う。前年に伸びた結果枝の基部2芽を残して切る。

6 ブドウ

(1) 芽傷処理

昨年伸びた新梢を長く残す場合(特に若木の時は長く残す場面が多い)、前年にせん定した位置から3~4芽しか発芽しない場合があるため、必ず芽傷処理を行う。芽傷処理は、2月下旬から3月上旬に行い、各芽の先5~10mmの位置に、深さ2mm程度で長さ5~10mmの傷を入れる。ノコギリで芽傷をつけることも可能だが、ブドウ専用の芽傷鋏を用いることで、迅速・適切な処理が可能になる。

(2) ハウスの管理

ブドウは休眠が浅いので、ハウスを密閉したままだと早期に芽が動き出してしまい、春先の戻り寒波によって、寒凍害を受けやすくなる。保温を開始するまでは、ハウスはできる限り解放して温度上昇を防ぐ。

周年被覆の場合は、定期的に土壌の水分状態を確認し、乾燥しないように適宜かん水する。特に、樹液が動き始める2月下旬頃からは、土壌が十分に湿った状態を維持する。